

ニコラス・ラヴ『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』： 前書き・月曜日第一 - 四章¹⁾

田 口 まゆみ

Nicholas Love's *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*

Mayumi TAGUCHI

ニコラス・ラヴの前書き

「かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのです。」(ロマ 15:4)²⁾
これは、この世のすべての真のキリスト教徒の霊的な生は、来たるべきあの世での至福の生への希望によって特に堅固になると考えた、偉大なる師、聖パウロの言葉です。

平成15年10月31日 原稿受理
大阪産業大学 人間環境学部

- 1) 『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』(*The Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*) は、カルトジオ会、マウント・グレイス小修道院長ニコラス・ラヴが、偽ボナヴェントウラによる『キリストの生涯の黙想』(*Meditationes Vitae Christi*) を15世紀初めに翻訳・加筆した作品であり、その後数世紀にわたり広く読み継がれました。この、英国文化・文学に大きな影響を与えたけれど、あまりにも知られていないラヴの作品を、ちょうどラヴが *Meditationes* を英語に直したように、今度は日本語に直して多くの人に知られる形にしたいと考え、田尻雅士氏(大阪外国語大学)と本稿訳者で輪読会を始めました。各曜日に対応する七つの部分と「秘蹟について」をあわせた八部からなる本書を、曜日ごとに交代で担当してゆく計画ですが、それぞれの責任部分について、成果を随時発表してゆくことで、他の方々のご意見もいただき、より良い形での出版に結びつけることができるのではないかと考えています。今回、田口担当「前書き」と「月曜日」の一 - 四章の翻訳を以下に掲載し、読者の方々の忌憚無いご意見・ご指導を仰ぎたく思います。なお、「月曜日」の五 - 九章と簡単な紹介文を次の機会に掲載する予定です。写本は、ラヴの原文あるいはそれに近いと考えられている、Cambridge University Library, MS Additional 6578を底本として使用しています。
- 2) 聖書からの引用はウルガタ聖書の章・節番号によって示すこととする。日本語訳には共同訳を主に採用したが、一部必要な箇所では、独自の訳を付している。

それは、この希望を育み、強くする主な二つのものが、忍耐の心と、書物に書かれた聖人たちの徳高く、清らかな生きざまに示された手本であるということです。特に、まことの神であり、肉体を持ってこの世に暮らされた間は人であられた、我らが主イエス・キリストの御言葉と御業^{みわざ}がこれにあてはまります。そこで、この希望を胸に、心を強く持ち、慰めを得ることができるよう、使徒パウロは、上のように言ったのです。聖教会で広く語り伝えられるすべてのこと、特に我らが主イエス・キリストについてのことがらは、聖書から忍耐と慰めを得ることで、希望、つまり来たるべきあの世での生と至福への希望を持つことができると教えるために書かれたのです。

この点に触れて、聖アウグスチヌスは、「子なる神は、人となり、人の罪を負い、人の業となられた」と、言っています³⁾。この業とは人の想像力を超えたものです。なぜならば神の子の従順によって癒されない驕りはないからです。神の子の清貧によって癒されない強欲はないからです。神の子の忍耐で癒されない怒りはなく、神の子の慈愛によって癒されない悪意はないからです。さらに神の子は、善い生き方の手本としてご自分を差し出されました。その人、イエス・キリストの御言葉と御業^{みわざ}を心の内に見、これを愛し、これに倣う者が、罪や悪の心から自由になり、それらから守られないはずはありません。そこで、男も女も、老いも若きも、この世での地位にかかわらず、永遠の生命への望みをかき立てられるのです。そしてこの希望のために、この目的のために、聖書に関して、敬虔な人々について、様々な書物や文献が、学者たちのためにラテン語で書かれたばかりでなく、ラテン語の読めない男女、教養のない人々のためには英語で書かれてきたのです。

そうした書物の中に、キリストの生涯について、四使徒による福音書よりも一部さらに詳しく敬虔な黙想が記されたものがあります。敬虔な信者であり、偉大な学者であったボナヴェントゥラが、ある修道女のためにラテン語で書いたものだと言われていますが、この書物は、特にイエスさまへの愛をかき立てる有益な事項について記したものです。また、誰にでもわかるように平易な表現で書くことは、何よりも、とりわけ純朴な者たちには教育的なことであるように思われます。それは、子供の食事には、高度の学識や高尚な観想といった重たい料理よりは、軽い教えのミルクを与えるべきであることに似ています（1コリ 3: 1-3）。

そこで、ある敬虔な人々から、そうした男女を教え導くべく請われたので、このキリストの生涯についての書物を英語に書き直すことにしました。教養のない人々にとって最も有益で教育的であると思われる限りにおいて、時には筆を加え、また、時には、様々な先人の権

3) Augustine, *De Agone Christiano*, PL 40 : 297.

威ある言葉やことがらを削ってもいます。聖ベルナルドゥスも言うように、そうした純朴な魂にとって、人キリストを観想することは、神について崇高な観想をすることよりはるかに好ましく、有益で、确实であるからで、そうした人々には、受肉したキリストの受難と復活のイメージをしっかりと植えつけることが一番肝要です。そうすれば、肉体や実体を持ったものしか想像することができない純朴な魂も、各々が感じるることができる何かを理解することができ、敬虔な心を育み呼び起こすことができるのです⁴⁾。天上の神、天使、またその他の霊的なものの描写、言葉、行為はこのような方法で、そうした目的のためにのみ書くことができるということを、初めに、この書物にこれから続く様々な想像の、主要で一般的な規則として理解しておきましょう。つまり敬虔な想像と連想によって純朴な魂が神への愛へと、天なるものの切望へと駆り立てられるようにです。聖グレゴリウスが言うように、目に見えるもの、生得の力で理解できるものによって、霊的な目に見えないもの、生得の力で理解できないものを愛し、求める気持ちをかき立てられ、恍惚に至るよう、天の王国はこの世のものになぞらえられるのです⁵⁾。さらに聖ヨハネはイエスの行ったことのすべてが福音書に書かれているわけではないと言っています（ヨハ 20:30）。ですから我々は、敬虔な心を呼び起こすために、イエスさまの様々な言葉や行為など、書かれていないことを、信仰に反しないように、想像し、思いを馳せることが許されるのです。聖グレゴリウス、またその他の学者も、聖書は、信仰や善い行いに背かない限り、様々な、様々な目的のために、解釈し理解することができると言っています⁶⁾。ですから、我らが主イエスや話題となるその他の人が、こうされたとか、こう言われたとか、この本に書かれている時や場所は、聖書で証明できない場合もあり、あるいは聖なる学者たちがはっきりと言ったという根拠がないこともあります。ひとつの敬虔な黙想として、そのように言われた、されたかもしれないのみ理解されるべきです。

そのように、この書物には、キリストの生涯についての様々な想像が盛り込まれていますが、キリストの生涯は、初めから終わりまで常に清らかで罪にまみれず、他のどんな聖人の生涯も凌駕していました。そして、類まれなる卓越性のゆえに、いみじくも『イエス・キリストの尊い生涯』と呼ばれるこの本は、他の聖人伝のように十分に描ききれないので、い

4) William of St Thierry, *The Golden Epistle (A Letter to the Brethren at Mont Dieu)*, Cistercian Fathers Series 12, 68-69.

5) Gregory the Great, 'Homilia XI,' 1, *XL Homiliarum in Evangelia Libri Duo*, PL 76 : 1114-15.

6) Cf. Gregory, 'Epistola Missoria,' *Moralium Libri, sive Expositio in Librum B. Job*, PL 75 : 509-16

わば鏡に映しだされる人の顔のように、似姿として描いています。そこで本書は『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』と称するのが適当でしょう。さらに、本書にふさわしい題材について触れ、前述のボナヴェントゥラは、前述の女性にあてて、前書きをこのように始めています。

ボナヴェントゥラの前書き

聖処女セシリアの美德を誉め伝える話の中に、彼女がキリストの福音書をいつも胸に隠し持っていたという逸話があります⁷⁾。それは、セシリアが、福音書に書かれた、我らが主イエス・キリストの尊い生涯のうち、ある部分を取りわけ神聖であると考えたからだと理解することができます。その箇所にセシリアは黙想と想いを、昼も夜も、清らかな完璧な心で傾けたのです。そしてキリストの生涯についてすっかり読んでしまうと、また初めから読み返しました。そのようにして、キリストの福音書を、魂で味読し、喜びを得たのです。セシリアは、これを常に胸元に秘めて持ち歩いていました。あなたも同じようされることを勧めます。あらゆる魂の鍛錬の中でも、これこそ最も必要で最も有益であると信じるからです。そしてこれこそ、最も優れた善い生きざま、つまり、この世をあくまで軽蔑すること、忍耐、つまり逆境に耐えること、そして徳を増やし身につけることにこそ立脚した善い生き方に導くことができると信じるからです。まったく、虚栄心やこの世へのまちがった執着に対して揺るぎない心を保ち、また、苦難や逆境において強い心を持ち、そしてさらに、悪を遠ざけ美德を身につけることができるよう完璧に教え導くことができるものは、生涯完全無欠であられた、我らが主イエスの尊い御一生をおいて他にないからです。

第一に申し上げたいのは、イエスの尊い生涯について懸命に、習慣的に黙想することが、この世の虚栄とまちがった執着に対して、魂と心を堅固にするということです。このことは前に触れた聖処女セシリアの例にはっきりと示されています。聖セシリアは心をキリストの生涯で完全に満たしていたので、この世の虚栄はその心に入り込む余地がありませんでした。無駄に贅を尽くした絢爛豪華な結婚式で、楽器が吹き鳴らされ、歌が歌われる中、セシリアは心をただ神にのみ向け、「神よ、わたしの心とからだは清く保たれ、汚されることはありませんように。地獄に落ちませんように。」と、祈っていたのですから。

第二の忍耐については、殉教者たちが受けた様々な拷問の例があります。聖ベルナルドゥスが言うように、彼らは全霊と神への愛をキリストの受難と傷にそそぎ、苦難に耐えたのです。殉教者が、全身が引き裂かれる痛みを耐えながら、苦痛の中で、それでも喜びに心満たされる時、その時彼の魂と心はどこにあるとお思いでしょうか？そう、イエスの傷の中に、

7) *Legenda Aurea*.

そう、閉じることのない、大きく開いて差し招くその傷の中にこそあるのです。さもなければ、彼は固い鉄をつぶさを感じ、痛みや悲しみを耐えることができず、じきに負けて、神を否定するにいたるでしょう⁸⁾。殉教者ばかりではありません。告解をする者たち、^{おとめ}処女たち、その他この世を軽蔑して正しく賢明に生きる者たちが、多くの苦難、病、懺悔の苦行において、強く耐えるのみならず、上に述べたように、魂の喜びを感じるのです。なぜならば、キリストの尊い生涯を黙想する時、彼らの心が、彼ら自身の身体ではなくキリストの身体の中にあるからに他なりません。

キリストの尊い生涯を黙想することが、悪を退け、なにより徳を得る方向に導くという第三の点については、すべての徳の完成がキリストの生涯に見出されるということに証明されています。至高の慈愛、徹底した清貧、深遠な従順、忍耐強さをはじめとする美德が、イエス・キリストの尊い生涯において他に、それほど明白に示された例、教えをどこに見出すことができるでしょうか？

これに関連して、聖ベルナルドゥスは、「美德を得ようとして、美德を治める主のもと以外にこれを求める者は徒勞を働く。主の生涯は、自制とその他すべての美德の鏡である」と言っています⁹⁾。

さあ、キリストの尊い生涯を敬虔に観想することの大いなる慰めと魂の益がここにあります。この書物の果実を真に体感したいと切望するあなたは、あなたの全思考と全意志を注いで、あたかも肉体の耳で聞き、目で見ているかのように、そして、懸命に、喜んで、倦むことなく、他のすべての仕事や用をしばし捨ておき、忘れて、ここに記された、我らが主イエスの御言葉と御業の場^{みわざ}に魂を置かなくてはなりません。

この書物、すなわち『イエス・キリストの尊い生涯』の最初の主題は当然「受肉」ではありますが、まず、その前になされたことについて、天上の神と天使たち、また地上では、祝福された^{おとめ}処女、聖母マリアさまについて触れ、敬虔に想像し、思わなくてはなりません。また、この書物は、一週間の七日にあわせて、七つの部分にわかれています。日々、その曜日に割り当てられた一章あるいはその一部を、それを熱望し、熱愛する人が観想するようになっています。つまり、週の初めの労働日、月曜日に、この霊的な書は始まります。まず、人を奪還し、救済するために天使が熱心に請い願ったことが語られます。他ならぬ特にその日に、天使を讃えるように人々の心をかき立てるため、聖教会もその日は特に天使を想うよう定めています。また、この書物の内容は、そう望む者、できる者が、これらの日に観想す

8) Bernard, 'Sermo in Cantica Canticorum LXI'. 7-8. PL 183 : 1073-74.

9) Bernard, 'Sermo in Cantica Canticorum XXII'. 11. PL 183 : 883-84.

るのにふさわしく有益であるばかりでなく、一年の折々にふさわしく、たとえば降臨節には、初めから我らが主イエスのご生誕までを読み、敬虔に心に描き、その後、クリスマスの聖祝祭には、その続きをというように、他のことがらについても聖教会が暦に従って勧めるように読むのがよろしい。

そして特に、この書物を読み、あるいは聴いて、魂に甘美なるもの、恩寵を感じた方は、著者に、そしてそれを、上に書いたように、純朴で敬虔な魂のために、このように英語に置き換えた翻訳者のために、どうぞ祈ってください。これで前書きは終わります。次に、月曜日のための観想、第一部第一章が始まります。

【第一部 月曜日】

第一章 人を奪還し、救済するために天国で開かれた大会議についての敬虔な黙想

人は、神に逆らい罪を犯して、天のいと高き都の王である全能の神の正しい裁きにより天の御国から追放された後、みじめに牢獄につながれて、地獄の暴君、悪魔に支配され、五千年以上もの間、誰一人天の御国に戻ることができずにいました。そこで、天の尊い天使たちが、ルシフェルとともに墮天した仲間の穴埋めを願い、墮天使たちに代わって天に住むべく創造された人類がそのように長く不遇にあることを憐れんで、彼らを奪還したいと、幾度も、そして恩寵の時には特に強く、人の魂が救済されるよう祈りを捧げました。わたしたちが敬虔に想像することができるとおり、すべての尊い天使たちが、心をひとつにして、至上の愛を込めて、天の全能の神の玉座の前にひれ伏しました。そして、聖ベルナルドゥスも言うように、キリストの受肉について、特別に啓示を受けることになる大天使ガブリエルが、天使を代表してこのように言いました。

「全能の神よ、終わらない善である主の御心にかない、主は、無からあの高貴で理性ある生き物、人間を、我々を慰め、我々のためになるようにお創りになりました。神に反逆し墮天した我らの不実の友ルシフェルとその仲間に代わって、我々と共に、この幸せの地に住み、とこしえに主を誉め、讃えることができるように意図されたのでした。しかし、善き主よ、ご覧ください。人はみな滅び、誰一人救われぬまま幾千年が過ぎました。人の姿はここ天上に見あたりません。我らの敵が勝利したのです。我々の仲間は、彼らから奪還されないまま、地獄の牢獄を続々と満たし続けています。

「主よ、人はなぜそのような悲運の元に生まれるのでしょうか？主の義にもとづいてなされたことですが、とはいえ、主よ、慈悲をお示しになる時ではありますまいか。主は、人を主の似姿にお創りになりました。彼らの始祖が愚かにも主の御言葉に従わなかったからだとはいえ、主の恵みは、何にも勝っているはず。ですから、人々の目は、従僕が主人の手をじ

っと見るように、あなたの上に注がれているのです。彼らを憐れみたまひ、早急に救いの手を差し伸べたまえと祈りを込めて。」

慈悲と真実その他との討論

ここに王の四人の娘、すなわち、**慈悲と真実**、**平和と正義**の間の口論、論争が始まりました。この四人のうち、**慈悲と平和**は、先の天使たちの祈りに応え、人を取り戻すことに好意的でした。しかし、他の二人の姉妹、**真実と正義**は反論しました。聖ベルナルドゥスも敬虔な想像により、このいきさつを見事に、また長々と語っています¹⁰⁾。しかし、ここでは、目的にあわせ、短くかいつまんで、おもむきも少々変え、表現も変えて、次のように想像し、考えることができます。まず、**慈悲と平和**は父なる天の王の前に跪き、預言者ダビデの言葉を借りて、次のように言いました。

「主はとこしえに突き放し再び喜び迎えてはくださらないのでしょうか。主の慈しみは永遠に失われたのでしょうか。」(詩 76:8-9)¹¹⁾

そして、これを幾度も長い間繰り返しました。すると、主が言われました。

「他の二人の姉妹を呼ぼう。あそこに控えているのが見えるであろう。彼女たちがこの点について何と言うか聞いてみよう。」

二人が呼び寄せられ、そろってやって来ると、**慈悲**がこのように始めました。

「慈悲深い父よ、永遠の御心により、あなたの娘たち、わたしたち姉妹の中でも、特にこのわたしに、父上と並んで天国を統治することのみならず、地がわたしで満たされ、あふれるよう、なべての御業みわざに対する特権をお与えくださいました¹²⁾。それは、誰であれ、どんな悲運や困難においても、心から懸命にわたしの助けを乞う者は、わたしの仲介によって、間違いなく、あなたの救い、助けを得ることができるべきであるというものです¹³⁾。しかし、父上、ご覧ください。地上の立派な者たち、父上がお創りになった気高い人間が、大変惨めなありさまで、長く不偶をかこち、ずっと泣きながらわたしの助けを求めています。今こそ、父上の手を差し伸べ、人をお救いになる時。そうでなければ、わたしはいないのも同じ。面目を失うでしょう。」

ここで、姉妹の一人**真実**が反駁しました。「しかし、わが父、真実の神よ、わたしこそあなたの初めの言葉であることはよくご存知のとおりです¹⁴⁾。人をあのように立派にお創りに

10) Bernard, 'In Ann7unciatione Beatae Mariae Sermo I', 9-14, *PL* 183 : 387-90.

11) マージンにラテン語で引用 : Ps. 76 : 8.

12) マージンにラテン語で引用 : Ps. 144 : 9.

13) マージンにラテン語で引用 : Ps. 118 : 64.

14) マージンにラテン語で引用 : Ps. 118 : 160.

なった後、わたしを人に嫁がせ、人が父上の命に背いた場合はすぐさま、彼とその子孫はすべて、至福の命を失い、呪われ、死ぬのだとお決めになりました。ですから、わたしを捨て、父上とわたしの敵、虚偽の父（ヨハ 8:44）の元に身を寄せた人間には一妹正義よ、証言してください—当然の死を与えないなら、わたしが破滅し、面目を失います。」

次に正義が発言しました。「正義の主、父なる神よ、あなたはわたしにあなたの永遠の戒めの管理を任せ、姉真実をあなたの掟の導き手にお命じになりました¹⁵⁾。慈悲は憐憫の情と、人を救済しようという熱い気持ちに駆られています、彼女は、父上とそしてわたしたちに対しても大きな罪を働いた人間を、相応の償いもなく救おうとしているのです。それは、わたしたち姉妹二人、つまり真実と正義を破滅させ、わたしたちの名折れとなりましょう。」

ここで四番目の娘、つまり平和が進み出て、まず姉たちの攻撃的な言葉と対立を冷静に批判し、自分の主張を次のように述べました。「姉上たちもよくご存知のはずです。父上はわたしのいるところのみをご自分の場所として決め、定めてこられました¹⁶⁾。わたしは争いや不和のあるところに住み暮らすことはできません。争いや不和が美德と共にいるのは見苦しく、道に外れたことです。争いはやめて、歩み寄られてはいかがですか。さもないと、わたしは、お姉さま方だけでなく、父上のもとも去らなければならなくなります。」

さて、我らが主の四人の娘の間にこのような大きな論争、意見の対立があったので、人の救済について、慈悲と真実、平和と正義をどのようになだめ、協調させることができるのか見当がつかないほどでした。

そこで天の父は、神と神格を共有し永遠の王である息子、至上の知恵にすべての判断を委ねているので、四人の娘たちもそこへ行き、知恵にこの問題を解決し、裁きを下してもらうよう命じました。

すると、王である至上の知恵は、この件に関して判決を書きしたため、彼の書記官である理性のところへ持って行き、知恵の名前で、次のように読み上げさせました。

「ここにいる真実は、人間に当然の報いである死を与えないならば、身の破滅であり、名折れとなると主張し、その妹正義もこれに同意している。一方慈悲は人間に慈悲を与え、救済しないのであれば身の破滅であり、面目を失うと主張し、妹平和がこれに同意している。

「この四人の意見をまとめ、またこの件に最終的決断を下すために、一人の人に良い死を与えることにする。罪にけがれない者で、無実のまま、人類のために、愛ゆえに死ぬことができ、またすすんでそうする者を一人見つけるのだ。そうすれば、四人すべての主張が通る

15) マージンにラテン語で引用：Ps. 118：142.

16) マージンにラテン語で引用：Ps. 75：3.

ことになる。その時、死は、罪もなく道を外してもいないその者をもはや引き止めることができない。死に、その者の身体を貫く穴を開けさせよう。その穴が道となり、人類はこの道を通って救われることができるようになる。」

この判決、決定に、天の法廷は満場感嘆し、**至上の知恵**を褒め称え、賛同しましたが、一方、この慈愛の行為を行い全うすることができるものをどこに見出すことができるのだろうかかと自問したのです。そこで**慈悲**は**理性**を伴って、すべての階級の天使たちの中にこの行為をすることができるものがないかどうか探しましたが、見つかりませんでした¹⁷⁾。

また**真実**は、天からその下の雲までこの使命を全うすることのできるものがないかどうか探しましたが、できる者はいませんでした。

正義は地上にまで降りて、高い山から奈落の底まで、この善い、無実の死を引き受けることができる人間がないかどうか探しました。しかし、罪に汚れていない者は、生まれて一日の赤子の中にもおらず、姉妹のところに戻って、すべての人間が罪を犯しており、不適切であること、その尊い使命を果たすことができる者はいないことを告げました¹⁸⁾。こうして四人は、求める者を見つけることはできないのかと悲嘆にくれたのです。

その時**平和**が言いました。

『善を行う者はいない。』(詩 13:1b)¹⁹⁾と預言者が言ったことをご存知ではないのですか。後にその預言者は、付け加えて、一人の人が誕生するまで、と言っています。この一人の人というのは、先ほどの、人類の救済についての決定を下した方なのかもしれません。ですからその人に、手を貸してこれを実行してくれるよう頼んでみましょう。詩篇でこの預言者が、『主よ、あなたは大きいなる慈しみにより、人をも獣をも救われる。』(詩 35:7)²⁰⁾と言っていますから。』

しかし、その時、姉妹たちの中から、**理性**に対し、父と子と聖霊の三位一体の神のうちだれが人間になり、この慈悲の行為を行うのか教えて欲しいという声が上がりました。

そこで**理性**が言いました。

「父なる神は、父にふさわしく恐ろしく、力を持ち、子なる神は、賢く知恵があり、聖霊は、最も温和で優しい。先ほどの姉妹の合意ということでは、第二の神格が、人類にふさわしい救済、敵に対する、最も理にかなった勝利にいちばん都合がよいように思える。なぜなら、第一の神格が望ましくない理由として、もし、父なる神がこれをするなら、父に対する恐れ

17) マージンにラテン語で引用：Ps. 35 : 6 from Bernard.

18) マージンにラテン語で引用：Job 14 : 4, Vetus Latina. from Bernard.

19) ベルナルドゥスからマージンにラテン語で引用：Ps. 13 : 1b.

20) マージンにラテン語で引用：Ps. 35 : 7.

とその力のために、慈悲と平和が、彼女たちにとって、完璧には好ましくないと疑いを抱きかねず、他方、同様に、聖霊の至上の温和さと優しさのために**真実**と**正義**が、償いが足りず、慈悲が過多であると恐れるかもしれないからである。そこで、両者にとって同様に好ましい中庸として、子なる神が、その至上の賢明さと知恵でこの使命を遂行するのに最もふさわしい。

「さらに、人はその知恵の欠如と愚行によって罪を働いたのであるから、その償いが、真実の知恵、つまり子なる神によってなされることは、人類にとって、最もふさわしい救済であると思われる。人は、悪魔に騙されて死ぬことになったのだから、神の真実の言葉によって永遠の生に復活すべきなのである。敵に対する最も理にかなった勝利については、悪魔はよこしまな策略と偽りの知恵によって人を攻略したのだから、これを正しい策と真実の知恵で打ち負かし、叩きのめすことは正しいのである。」

このように**理性**が決定を言い渡すと、父なる神がそうすることが神意であると述べ、子なる神も喜んで同意し、聖霊もまた実現に向けて働くと言いました。そこで天使たちがそろってひれ伏し、聖なる三位一体の神に敬虔に感謝を捧げました。そして、先の四姉妹は互いに口づけを交わし、仲直りして、「慈悲と真実は出会い 正義と平和は口づけし」(詩 84:11)という預言者ダビデの言葉が成就したのでした。こうして、人類の奪還と救済についての天の大会議が終わりました。

以上の話は比喩として、一種のたとえ話、人の心に、慈しみ深く、限りなく善である神に対する至上の愛をかき立てる、また、人に同情し、人類の救済のためにやむことなく働きかけてくれた尊い天使たちを讃え敬い、徳を愛し、人類にこれほどまでの災禍をもたらした罪を憎むようになるための、敬虔な想像としてのみ解釈されるべきです。

イエスの受肉に先立って、天上で行われたことについて、以上、このように、敬虔な観想によって考え、言うことができます。次に、地上に目を向けて、尊き聖母マリアさまがどのようなご様子であったか、次章に続くイエスの受肉以前にこの地上でどのように暮らしておられたか考えて見ましょう。

第二章 尊き聖処女マリアさまの人生について

我らが聖母マリアさまの伝記に記されているように、マリアさまは3歳の時に父と母から寺院に供され、そこで14歳まで過ごしました。その間何をされ、どのように過ごされたかは聖エリサベトとして知られている、ひとりの敬虔な女性への啓示によってわかっています。この啓示の中に、聖母さまが、エリザベトにこのように語られたことが記されています。

「わたしの父母がわたしを寺院に残した時、神を父とすると志し、心に固く決めました。

そして繰り返し、心を込めて神の御心にかなう何をできるのか考えました。そうすればきっと神がわたしに恵みを下されると信じたのです。そうしてわたしは、わたしの主である神の掟を教えられ、学んだのです。神のすべての命令を取めたその掟の中でも、特に三つのことを心に決めました。

第一は、「主なる神を心、魂、考え、力のすべてを傾けて愛しなさい。」です。

第二は、「隣人を自分自身のように愛しなさい」(マタイ 22:37-39)。

第三は、「敵を憎みなさい。」です。

「これらを、真に心にとめ、じきにその中に含まれる徳のすべてを身につけました。なぜなら神を全霊で愛さない魂は、いかなる徳も持ち得ないからで、この愛から、すべての数多の恩寵がもたらされるからです。そしてこの恩寵は、敵、つまり悪と罪を憎まなければ、訪れても魂の中に留まることなく、水のように流れ出ます。なぜなら恩寵を受け、それを保持しようとする人は、いわば、自分の心に愛することと憎むことを命じざるを得ないからです。ですから、あなたも、わたしがしたようにすることを望みます。

「わたしはいつも真夜中に起きて寺院の祭壇の前に行き、渾身の願いと思いと愛情を込めて、それら三つの言いつけと、その他すべての掟の教えを守ることができるよう、全能なる神の恩寵を願いました。そうして祭壇の前に立ち、わたしは神に七つの懇願をしました。それは次の七つです。

第一に、わたしは、愛の教え、すなわち神を心のすべてで愛すること等ができるよう、神の恩寵を祈りました。

第二に、神の御心と好みに従い、わたしの隣人を愛することができるよう、神が愛されるものすべてをわたしも愛するようにならざるようお願いしました。

第三に、神が憎まれるものすべてをわたしも憎み、遠ざけるようにならざるようお願いしました。

第四に、従順、忍耐、慈愛、優しさ、その他、わたしが神の目に優雅で好ましく映るようなすべての美德を願いました。

第五番目に神に願ったことは、かの、神の子を身ごもり産むべき聖母さまがお生まれになるべき時をわたしに示し、その方を見ることできるようわたしの目を、そしてその方のお言葉を聴くことできるようわたしの耳を、その方を賛美することができるようわたしの舌を、その方にお使えできるようわたしの手を、わたしの足を、その方に抱かれた神の御子を讃え、拝むことができるよう、わたしの膝をお守りくださいということです。

第六の願いとして、わたしは寺院の院長の言いつけと決まりに従順でいられるよう、

加護を願いました。

そして第七に、全ての人が神に仕えることができるよう祈りました。」

前述のキリストの僕、エリザベトは、この言葉を聞きおえると次のように応じました。

「ああ、優しき聖母さま、あなたは恵みに満ち、あらゆる徳に満たされているのではないのですか？」

すると尊い聖母マリアさまが答えました。

「わたしは、あなたと同じくらい罪深く、卑しく、神の恩寵にふさわしくない者であると思っていますのですよ。さらに、娘よ、わたしが受けた恵みのすべてをわたしが労なくして得たと思っているのですか。いいえ、そうではありません。神の力も、贈り物も、美德も、つまり母の胎内でわたしを清めた、聖なる恩寵以外は、大変な苦行、絶え間ない祈り、激しい願望、深い献身なく得たのではなく、また、多くの涙と、多くの困苦とともに、常に全力で、神に好ましいことを語り、考え、行ってやっと得たのです。」

聖母さまはさらにこう言われました。

「よく覚えておいてください。祈りと肉体の苦行によってのみ、人の魂に恩寵は訪れるのです。また、たとえ微々たるものであろうと、可能な限りのものを神に捧げた後、その時初めて神は人の魂にお入りになり、すばらしい恩寵の贈り物をもたらされるのです。すると魂にとっては、自分に欠けているところがあったからだと思え、すっかり度を失い、いったい自分は神に喜ばれるようなことを言ったりしたりできたか不安になり、自分がそれまでよりもさらに汚れて、あさましく見えてくるのです。」

これは、すべて、先の啓示の書に書かれています。

聖ヒエロニムスも、聖母さまの生涯について次のように書いています。

「尊い聖母マリアさまは、ご自分にこのような日課を課しておられました。夜明けから第三時までは、一心に祈りを捧げ、第三時から第九時までは織物の仕事に身体を使い、しばしば、第九時以降は、天使が来て彼女の前に姿を現すまで祈りをやめようとしませんでした。そして天使の手から、生命を保つための食物を受け取ったのでした。そうして彼女は、神の仕事に、神への愛に、神の道を着実に極めていき、徹夜の祈りでは右に出るものがなく、神の掟の知識においては最も有識で、従順においては最も謙遜で、ダビデの詩篇を歌うことにかけては最も調和的で美しく、慈愛においては最も優しく、純潔さにおいては最も清らかで、あらゆる美德において最も完璧になったのでした。

「彼女はまじめで心が揺らぐことがなかったので、日々ますます多くを得、怒ったところを見た人も聞いた人もありませんでした。言葉は常に恩寵に満ち、その言葉で、神を知ることができました。日々、祈りと神の掟を語ることに過ごし、常に、友がいかなる言葉によっ

でも罪を犯すことがないよう、みだりに笑ったりすることがないよう、また、誰も、傲慢やその他の罪から互いを傷つけることがないように気を配りました。そして神を讃えることを決して忘れず、万が一にも、挨拶されたり褒められたり、神を愛する気持ちが妨げられることがないように、いつ誰に挨拶されても、*Deo gracias*、つまり「神に感謝を」と応えることにしていました。こうしてマリアさまに始まった習慣にならって、聖人たちも挨拶されると、同じように、*Deo gracias*と応えるのです。

「マリアさまは、天使の手から受け取る食物をとり、教会の司祭から受け取った食物は貧しい人々に与えました。毎日、天使がマリアさまと語り、大切な姉や母にするように仕え、従いました。」と、このように聖ヒエロニムスはマリアさまの生涯について語っています。

そして、14歳の年に、尊い聖処女マリアさまは、神の啓示によってヨセフと結婚し、キリスト降誕の物語に逐一書いてあるとおり、ナザレの家に帰ったのでした。しかし、ここでは、主の受肉の前に起こったこととして、以上のことだけを心にとめ、瞑想することで十分でしょう。心から真剣にこれを思い、敬虔に観想して、美德を実践して例に倣うならば、その人は、多くの霊的な果実を得るでしょう。

さて次に、我らが主イエス・キリストの受肉について語りましょう。

第三章 イエスの受肉について。また、受胎告知の祭事とアヴェ・マリアの応唱

恩寵の時が満ち（ガラ 4:4）、三位一体の神が、アダムの罪によって呪われた人類を救うと決めた時が来ました。神は人類を大変愛しておられたので、憐れみの情に駆られ、また天の尊い天使たちすべての祈りと取り成しがあったので、そう決められたのでした。聖処女マリアさまが、ヨセフに嫁ぎ、ナザレの家に帰った後、父なる神が大天使ガブリエルを呼び寄せて次のように言われました。

「我らが愛する娘、ヨセフの妻、地上のすべての生き物の中でわたしたちにとって最も大切なマリアのもとへ行け。そうしてわたしの大切な息子が彼女の姿と美しさのみそめ、母として選んだことを告げ、喜んで彼を受け入れるよう頼みなさい。彼女によってすべての人類の治癒と救済が行われるよう、わたしが決めたのだから。それで、これまで人がわたしに行った罪をわたしは忘れ、許そう。」

さあ、集中して、霊的なことを、実体のあるもののように想像しなさい。あなたが、その尊い主の御前に実際にいるのだと思いなさい。主が、この言葉をどんなにお優しく、またうれしそうな表情で言われたか想像しなさい。一方、美しいガブリエルが喜ばしい顔つきで跪き、恐れ多い様子で敬虔に頭をたれ、主のこのお言葉を承る様子を想像してみなさい。ガブリエルは、すぐに喜び勇んで立ち上がり、高い空から地上へと飛び立ち、瞬く間に、人の姿

をとって^{おとめ}処女マリアさまの前に立ちました。マリアさまはその時、自室にこもって祈りと黙想のうちに、たまたま、主の受肉にふれたイザヤの預言書を読んでいるところでした。力の限りに飛んだにもかかわらず、使者ガブリエルの到着する前に主がすでに来ておられて、三位一体の神がそこにおられました。

この尊い受肉については、御子のみが受肉をし、人になられたけれども、聖なる三位の神全体の偉業であると理解しなさい。ただここで注意しなければならないことは、神と聖なる三位を想像する時に、父と子と聖霊の三位が、肉体の目でみる三人の人間、つまり、三つの異なる別々の実体であり、だから互いに異なるのだと誤解しないことです。そう、この霊的な三位の神の実体は、そのようではないのです。三人の神は、ひとつの実体、一人の神であり、しかも互いに異なるのです。とはいえ、人間の理性で理解できることでも、肉体的感覚で把握できることでもありません。ですから、この件に関しては、とりあえず一般的な教義に従ってください。三位について、あるいは神格について、あるいは天使や魂など肉体の目では真の姿を見ることができず、肉体的感覚では感じるできない霊的な存在について聞いたり考えたりする時には、決してこのことを深く詮索しないように。そして生来の理性で理解しようと、感覚をそのことばかりに注がないように。なぜなら、わたしたちがこの粗雑な肉体の内にこの地上で生きている間は、決して成しえないことだからです。ですから信仰において、あなたの生来の理性を超えたことを聞いた時は、教会が教えるとおりに真実だと堅く信じ、それ以上は詮索しないようにしなさい。

ですから、この受肉については、三位のうち第二位の神、天にまします神の御子が地を訪れ、聖処女マリアさまから肉と血を得て、真の人となり、しかも神としては、父なる神とも聖霊とも、決して離れることなく、常に、唯一の真実の神として天にいらっしゃったのだと考えなさい。

さて、先ほどの受肉の話に戻るとしましょう。しっかりと、次のように想像しなさい。あなたは、聖母さまの部屋にいます。そこには聖なる三位の神が天使ガブリエルとともにいらっしゃいます。

ああ、主よ、そのような客を迎え、そのようなことが行われた家とは、どのような家でしょうか。というのも、三位の神はいたる所にいらっしゃるとはいえ、この時神は、この^{みわざ}御業、受肉という偉業の性格上、特別な形でそこにいらっしゃったからです。

天使ガブリエルがマリアさまの部屋に入りました。聖ベルナルドゥスが言うとおりにその部屋は人には閉ざされていましたが天使には閉ざされていなかったのです。敬虔に跪くと次のように始めました。

「おめでとう、マリア、恵まれた方。主があなたと共におられる。あなたは女のうちに、

すべての女の上に祝福される。」(ルカ 1:28)

マリアさまはこの言葉、初めて聞くこの挨拶を聞き大変驚き戸惑い、何も答えることができず、この挨拶の意味について考え込みました。マリアさまは、悪意や罪深い悩みから恥じ入ったり、困ったりしたのではなく、天使を目の前にして驚いたのでもありませんでした。なぜなら天使が現れること、天使の姿を見ることには慣れていたので。しかし、福音書には、新しい挨拶について、「マリアはこの言葉に戸惑い」(ルカ 1:29)、と書いてあります。というのも、天使がそのようにマリアさまに挨拶をしたことはなかったのです。マリアさまは、その挨拶の言葉で、ご自分が三つの偉大な点で特に褒められ、讃えられていることを理解しましたが、完璧な従順を備えておられたので、そのように彼女を讃える挨拶を聞けば、恥じ入るしかなかったのです。恵まれた方であり、我らが主が共におられ、すべての女性に勝って恵まれていると、讃えられたのです。完璧に従順な者ならば、天使の賞賛を聞けば当然当惑し、恥じ入らざるを得ないので、マリアさまも、真に恥じ入り、また恐れおののいて、当惑し、驚いたのです。というのも、天使が嘘を言うはずはないことは承知していたものの、完璧に従順な者には当然のことですが、天使の言葉を恐れたのでした。自分自身の美德を見ず、むしろ、自分の欠点に目を向けるというたしなみを持ち合わせていたからで、それだからこそ、従順な者は、偉大な美德を小さく見、小さな欠点を大きく見ることで、常に徳を高めることができるのです。そこで、恥ずかしく恐ろしかったこともありますが、マリアさまは賢明で注意深い方でしたので、黙ったまま答えませんでした。

さて、このマリアさまの例に倣い、まず、天使が現れるのにふさわしいよう、独りで祈ること、人を遠ざけることを愛しましょう。さらに、話す前に聞くという知恵の教えを愛し、沈黙を守り、話さないことを愛することを愛しなさい、それこそ偉大で有益な美德です。マリアさまは、二度天使が話してから初めて、一度答えました。ですから乙女、あるいは^{おとめ}処女、特に、修道女にとって、おしゃべりは大変忌むべきことなのです。

さらに福音書にはこう記してあります。天使はマリアさまの様子を見て、恥じらいと恐れ

の理由を知り、マリアさまの思いに答えて、もっとわかりやすい言葉で、名前で呼びかけ、

「マリア、恐れることはない。」(ルカ 1:30)

と言いました。そして、
「今の挨拶の褒め言葉にとまどったり、恥じ入ったりすることはない。なぜなら、それは真実で、あなたは、自身が恵まれているだけではなく、「神から特別な恵みをいただいた」(ルカ 1:30) のであり、すべての人類に恵みを取り戻すのだから。『あなたは身ごもって男の子を産むが、その御子をイエスと名付けなさい。』(ルカ 1:31) それは、救世主という意味で、その方に希望を真に託す者全てを、その方が、罪と呪いから救うのだから。」と、言い

ました。

ここでベルナルドゥスはこう言っています。

「神よ、わが主イエスがわたしを彼の民の中に数えてくださいますように。わたしをわたしの罪からお救いくださいますように。なぜなら多くの人がイエスに知られていないのに、それら彼の民であると思われていない多くの人が、彼の民であるかのように振舞っているのではないかと心から恐れるからです。また、人々には他の者よりはるかに敬虔で清らかであると見える多くの人に、『この者たちはわたしを言葉では崇めるが、実は彼らの心はわたしからまったく離れている。』と、おっしゃるのではないかと恐れるのです。」と。

しかし、あなたがイエスの民であるかどうか知っていると、あるいはそうなりたいと願っているのであろうと、我らが主イエスが福音書と、掟の書と、預言書で命じられるとおりにし、さらに彼の聖職者たちを通してお命じになることに従い、教区司祭に従いなさい。彼らは聖教会におけるあなたの君主です。善であり正しく生きている者だけではなく、邪悪で正しく生きていない者であってもです。そうしてイエスに倣い、従順な心を持ち、服従を学ぶのです。その時あなたはイエスの恵まれた民になるでしょう。

さらに、天使が御子イエスをたたえて言った言葉を聞いてください。

「その子は偉大な人になるであろう。」(ルカ 1:32)

一時的な君主になるのでも、この世の権威において偉大になるのでもありません。なぜならイエスはそれらを捨てるからです。偉大なる神であり、人であり、偉大な、奇跡の預言者、真実を説く偉大な博士、悪魔に大勝利する偉大な征服者なのであり、そこでいみじくも『いと高き方、つまり主なる神の子と言われる、神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる』(ルカ 1:32)のです。神は人となり、先祖の血を引く肉体を持って生まれるということです。『彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。』(ルカ 1:33)のです。このヤコブの家とは霊的な聖教会を指し、そこでイエスは真の魂を治めるのです。まずここ地上では恵みによって罪と悪魔を負かし、次に天国では終わりのない至福によってお治めになるのです。

ここで、あなたも聖ベルナルドゥスと共に、イエスの王国の来たらんことを願い、次のように言うといいでしょう。

「わが主イエスよ、来て、あなたの国であるわたしの魂から、罪のすべての不名誉を取り除いてください。そして主がわたしの魂を正しく治めてくださいますように。「強欲」が来て、主権を主張します。「思い上がり」がわたしの主人になろうとしつこく迫ります。「傲慢」がわたしの妃になりたがります。「邪淫」は、自分が治めるのだと言い、その他「中傷」、「嫉妬」、「憤怒」、「貪食」が、わたしを一番に支配する権利を争い、わたしはといえば、何とか彼ら

に屈しまいと孤軍奮闘しています。わが主イエスよ、彼らを徳高きあなたの力で打ち負かし、わたしの内にあなたの王国を築いてください。わが主イエスより他に、真の王はいません。」

さて、天使が、上のような状況と御子イエスの尊さを、その母として選ばれた従順な^{おとめ}処女マリアさまに告げ終わると、やっと^{おとめ}処女は天使に答え、天使の言葉も、子を身ごもることも恐れず、また、先ほどの、天使の挨拶の褒め言葉を受け入れることも拒絶することもなく、一番恐れていたこと、つまり、処女を失うことがないという点についてもっとはっきりと保障して欲しいと願い、どのようにして子を身ごもるのか次のように天使に尋ねました。

「どのようにしてそのようなことはなされるのでしょうか。わたしは男の人を知りませんのに。(ルカ 1:34) またわたしは、主なる神に、貞節を間違いなく守ると誓いました。男の人と肉体的に関係を持つことは絶対にできません。」

すると天使が答えて、マリアに言いました。

「それは聖霊の働きで行われます。特殊な方法で聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包みます。あなたは処女を失うことなく身ごもり、だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれるのです。さらに、あなたの親類エリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっています。神にできないことは何一つないのです。」(ルカ 1:35-38)

さて、ここで、よく注意して心に描きなさい。まず、三位の神がそこにおられて、娘マリアさまが最終的に答え、同意するのを待ちながら、マリアさまの恥じ入った表情、真剣な様子、懸命な言葉を好ましくしっかりと見守っていらっしゃる。さらに、天の尊い霊のすべて、地上の正しく生きる人々すべて、アダム、アブラハム、ダビデなど、その時地獄にいた、選ばれた者たちすべてが、全人類の救済がかかった同意の言葉を待ち受けています。また、天使ガブリエルは、マリアさまの前に立ち、身を傾けて、穏やかな表情で、彼の伝えたことに対する答えを待ち受けています。方や、マリアさまは真剣な思いで、彼女への挨拶にこめられた賞賛にもかかわらず、高慢にも驕りにも陥ることなく、恐れと謙譲の心から真剣な面持ちで立ちすくんでいます。マリアさまは、それまでいかなる者にも与えられたことのなかった、彼女に対するこの上ない恵みの贈り物は、すべて神の恵みの賜物に他ならないと考えたのでした。

マリアさまに倣い、自分の美德について謙遜し、従順になりなさい。この双子の美德がなければ、純潔であることに価値はありません。

聖ベルナルドゥスが言うように、純潔はすばらしい美德です。しかし、従順はさらに重要です。初めの徳がなくても救われますが、後者、つまり従順の美德がなければ救われません。あえて申し上げますが、従順の徳が欠けていれば、マリアさまが^{おとめ}処女であったことも神には

好ましいものではなかったのです。マリアさまが従順でなかったなら、聖霊が彼女に降りて来ることはなかったと、聖ベルナルドゥスは言っています。

福音書が最後に述べているように、お優しいマリアさまは、天使の言葉を聞き、正しい考えで賢明に理解すると、終に、啓示の各書に記されているように、同意の言葉をこのように述べました。マリアさまは、敬虔に跪き、両手を高く上げて、天の方を見つめ、こう言ったのです。

「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」(ルカ 1:38)
このように、マリアさまが最後に言った従順な謙遜した言葉から、初めに彼女の沈黙に見たと同様の、偉大な従順の例を見ることができます。

マリアさまは神の母に選ばれ、天使ガブリエルから恵まれた方と呼ばれました。しかしマリアさまは、自分を「主のはしため」と呼んだのです。それは不思議ないこと。聖ベルナルドゥスも言うように、従順は、常に神の恵みと連れ立っているのですから。とはいえ、この従順は生半可なものではありません。聖ベルナルドゥスが言うように、悲惨な状況で従順であってもさほど賞賛的にはなりません、褒めたたえられた時に従順・柔和であることは偉大な美德であり、めったに見られないからです。

マリアさまが承諾されるや否や、神の御子が彼女の胎内に入られました。そして、聖霊の働きで、母の身体から真の肉と血を得て人となられたのです。自然の営みによって母に宿り、育つ他の子の場合のように、身体の一部が順番に作られ、それから魂が身体の中に注ぎ込まれるのではなく、御子は瞬時に五体満足の形になられ、心身ともに完全な、しかし、小さな人となられました。その後、他の子のように徐々に自然に大きくなられたのです。ですから、御子は初めから完璧な人であり神であり、今と同じく賢く、力を持った方でした。

そして、事が済むと、天使ガブリエルは聖母さまとともに跪き、またすぐに立ち上がると、敬虔に、低く地に頭を下げて、丁寧に別れを告げ、矢のように飛び去りました。天使は、天国に帰ると、天の宮廷で彼の使命が果たされたことを告げ、地上で行われたことを報告しましたので、天は新たな喜びに沸きかえり、歓喜と荘厳が満ちたのでした。

聖母さまは、聖霊によって満たされ、炎をつけられ、以前にもまして神への愛を燃え立たせました。御子を身ごもったことを実感したので、跪いてその偉大な贈り物を神に感謝し、従順に神に請い、敬虔に祈りを捧げて、彼女のもとに恵みを送り、御子の身にこれから起こること、なされることをすべて全うし、間違いなく行うことができるようにと教えを請いました。

以上、イエス・キリストの受肉の経過について福音書にそって触れました。

受胎告知の祝祭とその日に起こった事柄について

さて、この祝祭、この荘厳な儀式がいかに大切なものか、よく注意を払い理解しなさい。そして魂で喜び、あなたの心の中で特別な祝祭を上げ、心のうちで神に感謝を捧げなさい。これは前代未聞の事件だったのです。これは、この至上の受肉を、先に述べたように行い全うした父と子と聖霊、三位の神すべてに捧げる儀式だからです。これはまた我らが聖母マリアさまの特別な祝祭でもあります。この選ばれた日に、天の父がいとしい娘の中に入れられ、子なる神が優しい母の中に入れられ、聖霊がその特別な花嫁の中に入れられたからです。この日はまた、天の尊い天使たちすべての特別な儀式の日でもあります。ルシフェルの罪によって落ちた、彼らの仲間たちの奪還が、この日に始まったからです。しかし、なかんずく、この日は全人類の尊い祝祭、特別に荘厳な儀式の日です。この日に人類が、キリストの中で神とひとつになり結ばれ、ゆるぎない絆を築くというこの上ない名誉を授けたからです。そしてこの日に、人類の癒しと救済と天の父との和解が始まったからです。その時まで、神はわたしたちの始祖の罪と背反のために人類に対して激怒しておられました。しかし、愛しい息子が人になったのをご覧になって、その時以来、怒りを捨てられたのです。そこでこの日は、いみじくも、人にとって時が満ちたと言われるのです。

ですからこの日を、男女を問わず常に心に留めておかねばなりません。なぜなら、この日人は、神の似姿に造られ、天国の喜ばしい場所に据えられ、死を知らず永遠に生きるよう定められたからです。しかし同じこの日に、最初の人アダムが、禁じられた木の実によって彼の中の神の姿を汚し、あの喜ばしい場所を失い、永遠の死に呪われたのです。しかし、またこの日に、第二のアダム、神であり人であるキリストが、受肉によって神の姿を取り戻し、その後、十字架の木に下がり、その御身体という尊い実の力によって、人を至福と永遠の命に復活させたからです。

またこの日、最初の女性エバが、驕りから、地獄の悪魔、蛇に同意して、人類の破滅の原因となりました。そしてこの日、聖処女マリアさまが、従順から、天使ガブリエルの言葉を信じ、人類の救済のもととなったのです。

ですからこの日、人は大きな喜びと大きな悲しみの理由があるのです。まず、大きな喜びの日であるのは、神がこの上ない善と、名誉と、恵みを人に示された日だからです。そして大きな悲しみの日であるのは、人の大罪と神に背いた道ならぬ行為のためです。

ですから、この日と、このキリストの受肉と、我らが聖母さまの受胎告知の尊い祝祭について、このように観想することができるのです。

わたしたちが日々聖母さまを讃え、挨拶をするのに用いている、天使ガブリエルのあの尊い挨拶が、今見てきたように福音書にもとづくものである以上、もう少しこれについてお話

しましょう。この「天使祝詞」の挨拶は、あなたが唱える時に、あなたの敬虔な気持ちをさらにかき立てると思うからです。

この挨拶を教会が定めた形に従ってみると、五つの部分に分かれ、そのそれぞれに聖母さまの五つの喜びが表現されていて、五つの喜びには、聖母さまが地上の他の誰よりも優れて享受された五つの美德、つまり従順、貞節、信仰、希望、愛があると理解することができます。

「おめでとう、マリア」という二つの言葉から成る挨拶の最初の部分には、イエスを御懐妊なさるといふ、受胎告知の際の最初の喜びを読み取ることができます。前に話したとおり、「従順」がその喜びの土壌でした。そして、「おめでとう、マリア」は、この挨拶の最初にあるので、この祝祭はその他のすべての祝祭の始まりで、土壌となります。また、マリアさまの喜びと全人類の始まりなので、「従順」はすべての美德の出発点であり、土壌なのです。ですから「おめでとう、マリア」の中に、いみじくも受胎告知の第一の喜び、御子イエスを懐妊した喜び、なかならず「従順」の徳によって享受された喜びを理解することができるのです。

「恵まれた方」という第二の部分は、イエスのご誕生と、喜びに満ちたご出産の際のマリアさまの第二の喜びを表していると言えます。この場合の一番重要な美德は、「貞節と純潔」でした。ですからこの時マリアさまは、特に神の恵みに満ちたのです。清らかな^{おとめ}処女のまま母になられたマリアさまは、苦しみのない出産をされました。苦しまない出産をした女性は、マリアさまのみ、他にはいなかったのです。

「主が、あなたと共におられる」という第三の部分は、他ならぬ、ゆるぎない、まことの「信仰」の徳によって与えられた、御子イエスの輝かしい復活に際する第三の喜びを表していると考えられます。というのも、イエスがなくなられてから復活のその時までの間、使徒や弟子たちは、信心に欠け、絶望して去ってしまいました。マリアさまのみ、イエスが神であることを強く信じていらしたので、イエスはただマリアさまのおそばにのみおられたのです。ですから、その三日の間、聖教会の信仰はただマリアさまにのみ存続していたのであり、そのため、その期間について特に、「主が、あなたと共におられる」、つまり真の「信仰」によって、とマリアさまに言うことができたのです。また、その後、復活の時には、特に、そのお姿が最初にマリアさまに示されるという形で、「主が、あなたと共におられる」という言葉が具現されたのです。

第四の部分、「あなたは女のうちに、すべての女の上に祝福される」は、御子イエスが力強く昇天されるさまをご覧になった時の第四の喜びを指すと考えることができます。この時、他の女性は決して見たことがないもの、マリアさまから受け取った血と肉の神の肉体部分が、

神の力によって、天へと持ち上げられるのを見て、神である御子に託していた「希望」が完全に強く、確証され、自分も続いて天に昇るのだと恐れることなく考えたのです。そこで、「あなたの息子イエスが、力強く天に昇られるのを見ることで、あなたは女のうちに、すべての女の上に祝福される」と、その時言うことができたし、今聞くことができるのです。

第五の部分、「ご胎内の果実、御子イエスも祝福されたもう」は、マリアさまが御子イエスから受けた最後の喜び—尊い御子イエスが、聖母さまを天にお連れし、そこで敬虔に、永遠の天の女王として冠を授けた時の喜びを指すと考えることができます。その時、マリアさまの望みと「愛」が満たされて、満ちた「愛」によって御子イエスと永遠に結ばれ、御子は母に結ばれ、それ以上は望まないというまでに、その果実で腹満ち満ちたのです。その時、マリアさまは、あらゆる善と、恵みと、終わりのない喜びに満たされたからでした。

以上、このように、「天使祝詞」の挨拶の五つの部分に、優れて五つの美德を持っていらした聖母さまが、それらの美德のゆえに享受された五つの喜びを表していると理解することができます。この挨拶は、一般的に、英語では次のように唱えています。

Hail Mary, full of grace, Our Lord is with the. Blessed be thou in women, and the fruit of thy womb Jesus ever blessed be.

そしてこの挨拶にこめられた望みが、上に述べた、五つの美德による五つの喜びを指すのであれば、簡単な言葉で次のように唱えてもよいでしょう。

Hail Mary, 「おめでとう、マリア」: 「従順」な方。天使ガブリエルが、めでたいイエスのご懐妊を祝しました。

full of grace, 「恵まれた方」: 「純潔」の母として、尊い御子イエスを悲しみも痛みもなくご出産されました。

Our Lord is & was with the. 「主が、あなたと共におられる」: イエスの喜ばしい復活を信じた、心からの『信仰』のためです。

Blessed be thou in women, 「あなたは女のうちに、すべての女の上に祝福される」: 御子が力強く天に昇られるのを見ることで固まった「希望」によって。

and the fruit of thy womb Jesus ever blessed be. 「ご胎内の果実、御子イエスも祝福されたもう。」: 完璧な「愛」によって永遠の至福に恵まれ、輝かしく天の女王の冠を戴かれました。どうぞ、あらゆる苦難において、我々の助けとなり、終わりの時にはお救いください。アーメン。

お聞きになったことがあるでしょうが、この福音書、いわゆる *Missus est* (ルカ 1:26) には、イエスの受肉の過程と、聖母マリアさまの喜びの始まりと記録、人類救済の根拠が書かれています。敬虔に魂で強く熱望して、あなた、そしてすべてのキリスト教徒は、この福

音書に耳を傾け、我々のために人となられたイエスと、尊いその母マリアさまを讃え、拝まなくてはなりません。イエスとマリアさまを礼拝し、またあなたとわたしの魂のためになるように、この短い書物が役立ちますように。アーメン

第四章 我らが聖母さまがエリサベトを訪ね、謙遜に挨拶をする

前章で述べたイエスの受肉が行われた後、尊い処女マリアさまは、天使が従姉のエリサベトについて触れた言葉を覚えていて、共に神に感謝を捧げるため、また彼女の手助けをするために彼女を尋ねることにしました。そこで夫のヨセフと一緒に、ナザレから74マイルほど離れた、エルサレム近くの彼女の家に行きました。マリアさまはその長く困難な道を、出発を遅らせることも途中でゆっくりすることもなく、すぐに、急いで向かいました。というのも、公衆の人々に混じって人の目に触れることをできるだけ避けたかったからでした。つまり、我らが主イエスは、母に負荷を与えなかったので、マリアさまは、一般の女性のように、子を授かったことで身体が重くなったりはしなかったのです。

さて、よく聞いてください。天と地の女王、聖母さまは、夫と二人だけで、しかも馬に乗るのでもなく徒歩でその旅をしたのでした。大勢の騎士や貴族を引き連れるでもなく、侍女や女官を大勢お供させるでもなく、しかし、まことに、もっとすばらしい仲間、つまり「清貧」、「従順」、心からの「謙遜」、そう、その他すべての美德を大勢共に、そして、とりわけ、我らが主なる神とともに旅をしたのです。マリアさまは、すばらしく立派な仲間と共にいましたが、この世の虚栄や虚飾とは無縁でした。そして、ザカリアの家に着いて中に入ると、その妻エリサベトに、「おめでとう、お姉さま」と挨拶しました。するとたちまちエリサベトは喜んで、聖霊によって光り輝き、立ち上がって、愛情込めて抱きしめると、喜びのあまり優しく泣きながら、このように言いました。「あなたが女のうちに祝福されんことを。胎内のお子さまも祝福されんことを。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう...」(ルカ 1:42-43)。福音書にある言葉です。

そのように我らが尊い聖母さまがエリサベトに挨拶をされた時、母親の胎内にいたヨハネが聖霊に満たされて、それから母も満たされました。ただし、母が先で子が後だったのではなく、子がその果報で母を満たしたのです。聖霊の恵みが子により多くそそがれたからで、まず、子が、聖母さまが来られてそこにいらっしゃることを、すなわち我らが主がいらっしゃったことを感じ、恵みを感じ取ったのです。ですから、子は、内からの力によって喜び、母は、外からの力で語り、予言をしたのでした。

さあ、聖母さまの言葉にどんな美德がどれだけあるかよく注意してください。言葉とともに聖霊が与えられます。なぜなら、マリアさまは、それほど聖霊に満たされていたので、彼

女の美点と徳をとおして、同じ聖霊が他の者も満たしたからです。

そこで、エリサベトの言葉に対し、マリアさまが答えて言いました。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます…」(ルカ 1:47-) と唱え、魂の喜びと愛のカンティクムを歌い上げました²¹⁾。これが、福音書に記されているマニフィカト、「マリアの歌」です。

マリアさまが歌い終わると、二人はともに腰を下ろしましたが、従順の鑑である聖母さまは、エリサベトの足元の低いところに腰を下ろしました。しかし、エリサベトも、マリアさまが低いところに座ることを放置できずすぐに立ち上がり、マリアさまを立たせましたので、二人は、一緒に腰を下ろしました。そして、聖母さまは、エリサベトに、子を授かった経緯についてたずね、自分もまた、語って聞かせ、たがいに我が主のすばらしさを嬉々として語り合い、たがいの懐妊について、跪き神をあがめました。そうして二人はその後も、夜も昼も神に感謝を捧げつつ、魂の喜びにひたったのでした。聖母さまはそこに三ヶ月の間留まり、従順に、恭しく、敬虔に、召使のように、エリサベトの世話をし、できる限りの手助けをしたのです。神の母であられること、全世界の女王であることは忘れておいででした。

ああ、主なる神よ、そのように尊い母たちと息子たち、つまりマリアさまとエリサベト、イエスとヨハネがともに寝起きした場所は、なんとすばらしい家、部屋、しとねであったことでしょうか。そこには、立派な夫たち、ザカリアとヨセフもおりました。尊い父と母と子たちでした。

この聖母さまの訪問の話から、わたしたちは敬虔な男女が、教えを受けたり魂を高めるために訪問すること、つまり若い者が年上の者を訪れることは、ふさわしい時に正しい状況で行うならば、正しく、しばしば有益なことであるという例を見ることができます。神の恵みという贈り物は、空虚な喜びのためではなく、神を崇めるためならば、神の教えを広める目的で、他の人に言い伝えることができるのだということもわかります。

また、マリアさまとエリサベトの言葉をよく注意して読むならば、二人とも自らを低めることに徹していることがわかります。そうして神を崇め、神の御業を褒め称え、人々に神を愛し、崇める気持ちをおこさせるよう、神が人類に対して示された偉大な慈悲を語りあったのです。

さらに、エリサベトの月が満ちて、彼女に光が差し、子を産み落としますと、その子が聖

21) カンティクムとは、聖務日課(朝課・賛課・一時課・三時課・六時課・九時課・挽課・終課からなる日々の礼拝)のうち「ルカによる福音書」からとられた、ベネディクトゥス(賛課、ザカリアの歌：ルカ 1:68-79)、マニフィカト(挽課、マリアの歌：ルカ 1:46-55)、およびヌンク・デイメティス(終課、シメオンの歌：ルカ 2:29-32)を指す。

なる子であるしるしに、まず聖母さまがこの子を地面から抱き上げて、一心に、その子にふさわしく布にくるみ、世話をしました。またその子は、マリアさまが聖母さまであることを理解し、じっと彼女を見つめて、母親のもとに連れて行こうとした時も、まるで彼女だけが好ましいと言うように、マリアさまの方に頭と顔を向けるので、マリアさまは喜んでこの子をあやし、愛情込めて抱きしめて、口づけをしました。この話から、わたしたちは、この子の偉大さを見て取ることができます。それまでそのように尊い人に取り上げられた赤子はいなかったのですから。

八日目が来ると、掟に従って子に割礼が施され、福音書にあるとおり、神の奇跡によってヨハネと名づけられました。それまで不信心のために閉じられていた、父ザカリアの口が開き、舌がほどけ、このように予言したのです。「褒め称えよ、イスラエルの神である主を。主はその民を訪れて解放し…」というように福音書に記してあります（ルカ 1:68-）。こうしてこの家の中で、貴くすばらしい上の二つのカンティクム、すなわちマニフィカトとベネディクトゥスが最初に語られ、作られたのです。聖母さまは、その時、その子ヨハネの割礼に集まった人々に見られないように、垂れ布の影に立っていましたが、耳を澄まして懸命に、このカンティクム、ベネディクトゥスを聞いたのでした。その中には、マリアさまの尊い子イエスのことが歌われていましたが、彼女は賢く、また恵まれていたので、それを心の中にしまっておきました。

そうしてすべてが済むと、マリアさまはエリサベトとザカリアに別れを告げ、子供ヨハネを祝福して、ナザレの自分の家に帰って行きました。

ここで、特に考え、心に留めて欲しいのは、自分の家に帰ったマリアさまを待っていた貧困です。そこにはパンもワインもその他の必要な物もなく、マリアさまには所有物もお金もありませんでした。三ヶ月の間、何不自由ない、裕福な人たちと暮らしをした後、今、自分の貧困に、空っぽの家に戻ります。そこでは、自分の手と肉体労働で日々の糧を得るより他に仕方ありません。わたしたちは、おおいにこの状況に同情し、マリアさまの例に倣って、徳高い清貧を愛する気持ちをかき立てなければなりません。マリアさまに永遠の恵みがあらんことを。アーメン。